

春の特別展

潤一郎、終活する

—文豪谷崎 死への挑戦—

1965(昭和40)年夏、谷崎潤一郎は世を去る。79歳の誕生日を迎えたばかりであった。当時としては珍しいほどの長命だった文豪。晩年と呼ばれる、終わりの時を迎えつつある時期も長かったが、その間にも多くの名作・傑作・話題作を執筆し続けた。

日本が敗戦を迎えた1945年8月、60歳を目前にした谷崎は、「細雪」下巻の執筆にいそしんでいた。戦時下では「発禁扱い」であった、この生涯の名作の刊行完結が、1948年12月。その時、谷崎は、当時の平均寿命をすでに超えていた。「細雪」は、文豪にとって、戦後へのそしてその豊かな晩年への一里塚だったのである。

「細雪」以降、文豪じしんの現在とも重ね合わせられながら、「老いや病(やまい)」「そして「死」の問題が、創作の中心に据えられていく。その核心に、「性」をはじめ「母恋い」や「女性崇拜」など、かねて追求められてきた多彩なテーマも絡まり合いながら複雑に織り成されていく作品世界は、芳醇でユニークである。死の間際まで続けられた、そのエネルギーに富んだ執筆活動。それは、作家として人としての人生の集大成であり、死への挑戦の営みでもあったのだらう。

谷崎没後60年

2025年3/15(土)~6/8(日)

没後60年の春、文豪谷崎潤一郎豊穡の晩年、その「死へ挑んだ総括」―「終活の有り様を跡づけた」―



『細雪』冒頭部自筆原稿(複製)

夏の特設展

オン・ステージ

—舞台の上の谷崎作品—

谷崎文学は、「話の筋」のおもしろさ、「物語性」の豊かさを真骨頂とするともいわれる。それもあってか、舞台化される作品も多い。

劇的な作品の中でもドラマティックな「春琴抄」は、とりわけ多様に翻案されてきた。幼少から馴染み深い歌舞伎のエッセンスは、さまざまな作品へと反映し、それがまた、はね返っていくかのように歌舞伎化された。「細雪」「台所太平記」の通俗性は、「大衆文学」に共感した谷崎の一面でもあり、その親しみやすさは、商業演劇の娯楽の世界と近い。

文豪谷崎潤一郎の作品世界の幅の広さ懐の深さが、多彩なジャンルの舞台と響き合い、血肉を得ていくさまを紹介した。



『細雪』劇場公演歴代のチラシと2014年明治座講演のプログラム

冬の特設展

2025年12/13(土)~2026年3/8(日)

新人さん、いらっしゃい! —新着資料顔見世—

谷崎記念館所蔵の数多くの資料は、さまざまな生い立ちと遍歴を経て、たどり着いて来た。その中から、近年新たに仲間となった「新人さん」たちの、「顔見世」である。

師と仰ぐ先輩文豪永井荷風に宛てられた、敗戦時の二人をめぐる有名なエピソードを導いていく谷崎の手紙。なぜかバラバラに裁断された、小説の原稿。馴染みの医師への書簡に垣間みられる、家族思いの谷崎の一面。日本人で最初に授与されたアメリカの文芸アカデミーの会員証は、文豪最晩年の栄誉を輝かしく縁どっている……。

多士済々の新人さん、それぞれの魅力を、存分にアピールしていただいた。



『肉塊』直筆原稿

ロビーパネル展(秋)

2025年10/29(水)~12/7(日)

挿絵の森への誘い

—等身大立体パネルで体感する谷崎作品の世界—

「細雪」の主人公たちから、人魚や魔術師や美女、犬に人形まで…。谷崎作品を彩る数々の挿絵のキャラクターたちが、そのものの姿形と迫力のスケールの等身大立体パネルとなって林立する挿絵の森。そこは現実なのか、物語の世界なのか…。幻の挿絵の森を、文豪の名文とともに、さまよい歩き楽しむ、体感型のパネル展。



「梅ノ谷の家」一階の扉と谷崎館庭園

秋の特別展

2025年9/13(土)~12/7(日)

文豪は戦の間に咲く —谷崎の戦争と平和—

鹿鳴館のざわめき華やぐ東京に、谷崎潤一郎(1886~1965)は生れる。「脱亜入欧」の明治国家は、列強と対等自立の関係を築こうとしていた。武力を背景に、周辺諸国への支配をとまなう「帝国日本」の自立への道である。

20代半ばの谷崎が「刺青」(1910)で文壇デビューを果たす頃、日本は帝国の輪郭をようやく明らかにする。欧米列強に連なった日本は、やがて、人類初の世界戦争、第一次世界大戦(1914~1918)に参戦。ヨーロッパが主戦場のこの大戦で、戦勝国となった日本の損害は少なく、大きな経済的恩恵もたらされた。その好景気も背景に、近代化が進展。都市大衆社会が勃興、「郊外」という新たな居住圏も出現し、新しい生活様式と文化が発展する。大正デモクラシーとその文化の謳歌の時代である。一方で、帝国支配の展開は、日本社会の視界を広げ世界観を多様化させながら、やがて国際的な摩擦を生み出していく。そうした中で、谷崎は作家活動を本格化させていった。

そして、「細雪」は、郊外に暮らす新しい中産市民の、穏やかで豊かで美しい日常を描いて文豪の代表作となった。この名作は、第一次大戦以降の日本と世界の変容を家族の日常の中にとらえ返し、普遍的価値にまで昇華させたのである。物語は、中国との戦争が始まる前年の1936年秋に始まり、1941年春に幕を降ろす。その冬、日本は第二次世界大戦に参戦、この世界戦争は日本の破滅的な敗北によって終結した。が、「細雪」の生活世界は、戦争の奔流をも埋没させ生きのびて、新しい時代を導く力さえ秘めていた。

戦争と平和との間、大きく揺らぐ日本と世界の有り様を受けとめ、花開いていった文豪谷崎。その豊かな作品世界を読み解いた。

